古瓦から一切の墳墓を網羅してゐる。從來此種の內容を部分的に包括してゐる「朝鮮古蹟圖譜」等に容易に接することの出來ないものにとつて如實に展望することが出來るものであつて、斯學者を便することは云ふまでもない。

●日本石器時代植物性遺物圖錄

喜田貞吉、杉山壽榮男共編

題目のものは陸奧國三戸郡是川村中居の遺跡から植物の果核を始め其加工品が石器及土器と混在して發見した特殊な遺物を主とした圖錄である。この遺跡に就ては既に數年前から注視せられ興味ある資料の發見は必然的に東北地方の石器時代觀に幾多の新知見を齎らさんとしてゐるものである。喜田博士は其見解を次の如く述べられてゐる「思ふに是等の遺物を留めた我先住民族は單に或る事情の下に金屬利器を自由に製作使用するを得なかつたが爲に依然として石器時代の狀態に踏み止つて居たとは云へ、其の隣人としては既に金屬文化に住する先進民族を有し、彼等も不充分ながら刄物を入手して工藝品の製作に從事したのであつた事が、其の遺物の檢討から證明される。隨つて其の時代は當然本州に於ける石器時代の末期に屬し、實年代に於ても案外下つた時代のもので其民族的所屬が、日本歷史上所謂蝦夷系統のものであつた事は疑を容れぬ。恐らく彼等は其後遠からず日本文化を移入し、日本民族に混入して跡を絕つに至つたものであらう」云々としてゐる。因に植物性遺物の主要なものには漆塗飾弓、漆塗木太刀、篦狀木製品、漆塗脚付坏、櫛、耳飾、腕輪、容器等であり。伴存土器は龜ヶ岡式繩紋土器等であつてこれを四六倍判四十四葉に收載したものである。(定價拾五圓、東京神田、刀江書院發行)〔以上島田〕

●元寇の新研究

池內　宏著

蒙古襲來卽ち所謂元寇が、我國史上に於ける外寇の一大事件たるのみならず、支那史上に於ても亦注意すべき對外事件の一である事は世人周知の事である。この重大

な事件に關して、我國では舊幕時代から幾多の研究著述が現れ、遂に明治中葉に及んで山田安榮氏の勞作「伏敵編」が出るに至つた。其の後に於ても數多の興味有る研究が、新資料の發見に伴つて公にせられ、研究者の夫々の立場からして各方面に開拓の手が擴げられると共に、一方支那に於ても亦新資料の發見せられるものがあつた。然しながら、これ等の諸研究は新分野を開拓した所有りとは云へ、決して元寇の研究として十分に纒つたものでなく、又諸種の資料全體を科學的に綜合考察されたものではなかつたのである。かゝる際茲に池内博士の新著「元寇の新研究」が上梓せられて、學界多年の翹望が果される事になつたのは、學界の爲眞に慶賀にたへぬ次第である。

本書は東洋文庫論叢第十五として刊行せられ、本篇附錄の二冊より成る。本篇は例によつて博士の博引旁證に本く精緻な研究であつて、章を分つ事十二、四百三十七頁の主文に、主要事項年月表二十頁、圖版二葉を添へたものである。其の第一章より第六章迄は、元寇に至るの序論前提として、蒙古の征伐、懷柔による高麗の服屬、更に其の服屬を全からしめん爲の日本招諭の經緯と、高麗內部に於る當時の政治的事變を述べて以て日本征伐の準備に至つた迄の經過を述べてある。第七章より第十章は日本にて所謂文永・弘安の役と呼ばれる兩度に亙る戰役を、今日使用し得られる凡ての資料を引用して研究された本篇の主體部分である。而して博士の用ゐられた重要な資料は、從來既に日本に於てその價値の大を認められた竹崎季長の蒙古襲來繪詞であつて、其の繪詞の大矢野文を新に考定し順位を正して以て戰役の新解釋を試みられたに外ならない。第十一章は征東軍慘敗後に於る元の處置を、「沿海防備」と「始建の征東行省と其の廢罷」との二節に分けて述べてあり、第十二章は至元十九年以後の日本征伐の計劃を述べたもので、世祖の度々の計劃より最後に成宗の日本招諭の失敗に及んで、以て本篇の結びとしたものである。首尾一貫した堂々たる研究、或はその枝葉の部分には尙研究の餘地ないでもないと物ふが、實にその明快な研究によつて從來の諸疑問は殆んど雲散

霧消したのであつて、史家の裨益せらるゝ事大なるを信じて疑はない。巻末の主要事項年月表は本篇の中に出る各種事項の主要なものを、年月順に配列して以て各章節間の錯雜した關係を、一目瞭然たらしめた著者の用意周到な遠慮に本くものであつて、これ亦讀者の益せらるゝ所大なるを思ふのである。

附錄の別冊は別ち御物大矢野本蒙古襲來繪詞の縮寫複製で、著者の考定した新順位によつて其の繪詞を排列されたものである。この繪は後の「清太祖實錄戰圖」の滿洲族の戰爭樣式その他風俗諸態を明示する如く、世界的に活躍した蒙古兵の風貌武器軍船等を如實に知悉せしめるに足る貴重な圖錄であつて、或意味に於ては世界的珍寶と稱するも過言ではなからうと思ふ。全五十七葉の圖版より成る歴史的記念物。これ有るが爲に元寇の研究が如何に精彩付けられるか云ふ迄もない所である。

以上蕪辭を列ねて本書の紹介に代へる事にする。終りにこの勞作を出された博士の努力に滿腔の謝意を表すると共に、此意義ある出版を惜しまれなかつた東洋文庫の學績を衷心感謝する次第である。（四六倍判。財團法人東洋文庫刊。限定賣價拾貳圓）〔鶯淵〕

彙報

◉史學研究會

例會 二月六日午後一時半より樂友會館樓上に於いて開催、左の兩氏の講演ありて午後六時閉會した。來會者六十餘名。

桃山時代の襖繪に就いて　土田杏村氏

當代の屏障畫家として著名な松榮、永德、等伯、山樂に就いて從來作家の明瞭なものが少ない。殊に永德において甚しいものがあるを說き、其の推究の一法として氏は各作家の畫癖を仔細に分解且つ綜合して作風の根據をつかみ解決を與へんとし、論述の中心を永德の作風に置き、其の點描構圖土坡の形式及皴法を詳細に說き京都大德寺聚光院のものを以て永德の典型的大作であると論斷し、これに基いて京洛及近畿所在寺院の傳永德、元信と稱する作品に一々明快な批判を與へ、永德の作風は要するに時代的風格を表すと共に叙情味のあると云ふ個性に到達せしめられた。更に同樣の論法を以て松榮、等伯、山樂に就いて概要を說明さるゝ所があり、繪畫鑑識上主要な一據所を指示するものであつた。

琉球の墳墓に就いて　濱田耕作氏